

Title	ヘルマン・ノールにおける生の構造 : 人間論 (Menschenkunde)を中心にして
Author(s)	大久保, 智
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 5 P.125-P.141
Issue Date	1979-03
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4791">https://doi.org/10.18910/4791</a>
DOI	10.18910/4791
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ヘルマン・ノールにおける生の構造

—人間論(Menschenkunde)を中心にして—

形成系 人間形成論講座 助手

大久保 智

## ヘルマン・ノールにおける生の構造

—人間論(Menschenkunde)を中心にして—

### はじめに

人間にとって逃れることのできない運命とは、人間が、動物的存在であると同時に精神的な存在であり、現実のなかに生きながら、同時に理想を追求する存在であり、外から研究しようとする対象であると同時に、内から理解する実存(Existenz)であるという、二重的存在であることである。ヘルマン・ノールは、彼独自の「人間論」(Menschenkunde)を展開するに当たって、まさしくこの二重構造を根本において、人間の内奥の問題領域を論じたのである。彼は、1927年、ベルリンで行なった“Pädagogische Menschenkunde”と題する講演において、当時の要素心理学、能力心理学に対する批判の立場から、自然科学的心理学と精神科学的心理学の相互補完的提携の必要を唱えた。そしてその講演録の基礎にある彼の人間理解をさらに展開させたものが、1929年の同名の論文(“Handbuch der Pädagogik”, hrsg. v. Nohl und Pallat, Bd. 2, 所収 S. 51-75)であり、その論文での問題意識をさらに緻密な理論へと発展・結実させたものが、1938年に公刊された『性格と運命』(“Charakter und Schicksal”, 7. Auflage, 1970.)である。本論文で中心적으로とりあげるのは、この著作に示されたノールの、矛盾のまっただ中に投げ出されながらも、統一を苦心して獲得しようとする宿命的な人間の内奥の問題領域である。

結論をさきどりして、本論の展開の筋道を要約的に述べるなら次のようになる。人間の心の層構造は、衝動の層、気概(Thymos)の層、精神的根本方向の層、人格の層から成る。その際注目すべきことは、それぞれの層が矛盾・対立関係にあるということ、また前三者の層と第四の層とが対極的な関係にあるということである。彼は、層構造におけるこれらの関係を性格のもつ緊張構造として説いている(二)。緊張構造が緊張である根拠は、対立する事態が同時にそこにあるということ、言い換えるなら、対立しつつ「力動的な統一」がそこに達成されうるということである。ノールは、この論点を主観的性格と客観的性格の対立関係への深い知見に基づいて展開している(三)。人間の心の層構造における対極的な関係、主観的性格と客観的性格の対立関係が根ざしているのは、人間の生活現実の「多様性」であり「創造性」である。したがって緊張関係、対立関係から要請される「統一の問題」が意図するところは、人間の生が形式的な究極的中心的統一を絶えず目ざしつつ、内容豊かな統一を

苦心して獲得するという人間生成の理論である(四)。

## 一 方法の問題

ノールは『性格と運命』の副題を「教育学的人間論」(eine pädagogische Menschenkunde)と名付けたが、その副題には彼の、そもそも人間論は人間生成の理論であるという立場が示唆されている。しかし、そのような人間論が要求する人間理解はさまざまな困難な課題の前に立たされている。教育という場面において、われわれは子どもに直面し、人間に直面し、彼らを教育するために彼らを理解しようとする。その場合、われわれがさしあたり理解の手がかりとするのは、現象という外的様相である。しかしながら手がかりであるはずの外的様相そのものは、彼らの内面から理解されるほかはない。したがってそこには、あらゆる精神諸科学を貫いている了解作用の循環(der Zirkel des Verstehens)の問題がある。ノールはこの問題を避けることなく、むしろその循環の中に毅然として入りこみ、人間の運命としての矛盾に満ちた生活現実のまっただ中で遂行される人間生成についての理論を説こうとしているのである。人間理解にあたっての困難さは、そのみならず、人間が意図的に虚偽の自分を装うことができるということ、自分の内界(Binnenwelt)を隠し秘めておくことができるという点にもある。人間はけっして他者の「内界を、動かす力そのものとして理解することはできない」<sup>1)</sup>のである。なぜなら「内界は運命と体験と抑圧された願望と悩みから構築されている」<sup>2)</sup>からである。われわれはそのような領域に対して、外からただ部分的にばらばらの諸特徴を見ているにすぎない。もしそうであるなら、われわれにとって残された人間理解の方法とはいかなるものであろうか。ノールに依拠すれば、その方法はいかなるものでなければならなかったであろうか。

上述の、1927年ベルリン中央教育研究所主催の講演会における「教育学的人間論」という講演の冒頭で、ヘルマン・ノールは聴衆である教育関係者達に対して警鐘を鳴らした。すなわちそれは「切り離された抽象に基づくすべての知見が、そのまま教育に適用できるということへの信仰」<sup>3)</sup>に対する警鐘である。さらに言うなら、「生に対していつも硬直したままであり耳をとじたままである学問的構成」<sup>4)</sup>としての科学的心理学(wissenschaftliche Psychologie)のみに教育関係者達が「自分の仕事の決定的基盤を期待し」<sup>5)</sup>ていたことに対する警鐘である。彼によれば、教育者にとり必要不可欠であるのは、「ひとりひとりの子どもに直接にむかいあうこと」<sup>6)</sup>、すなわちほかならぬ自分による観察(die eigene Beobachtung)にもとづいて獲得された子どもについての知見である。約言するならば、「教育学的人間論」は、人格的な交流において(im persönlichen Verkehr)のみ真の意味で生起する」<sup>7)</sup>のである。

それでは彼の説く論 (Kunde) とは、一体いかなるものであろうか。彼は “Kunde” を *ἱστορία* (historia—探究) と同一視して次のように説く。「Kunde という語がすでに、科学 (Wissenschaft) の理論との対立を表わし」<sup>8)</sup>ており、それは分析的な科学に対する対立概念 (Gegenbegriff) <sup>9)</sup>である。それは「切り離された抽象に基づく科学」<sup>10)</sup>に対して、「生き生きとした前科学的な知」(das lebendige vorwissenschaftliche Wissen)<sup>11)</sup>を意味している。すなわち、「ばらばらにしたり組み立てたりする思惟以前に、具体的な生起の現実自身がある」<sup>12)</sup>のであり、ノールはこのような生起の現実に関して、「まだ抽象的で構成的な学問の段階ではないが、やはり理論を可能にするより高度な段階の内省 (Besinnung) にいたる道は存在するか」<sup>13)</sup>と自問している。この問に答える意味で、「生を正しく見る手だてとなる体系的内省」<sup>14)</sup>を彼は Kunde と呼んだのである。言いかえるならそれは、「人間の生活現実の構造法則とその形式についての教え (Lehre)」<sup>15)</sup>であり、「それに続く専門科学的分析の前提」<sup>16)</sup>としての教えである。

ところで、このような彼の説く Kunde はいかにして可能であったであろうか。まず注目すべきことは、Kunde としてまだ 確立されてはいないが、Kunde の前段階としての人間論的諸経験 (menschenkundliche Erfahrungen) をすでにわれわれはそれぞれの文化大系の中に所有しているということである。たとえば、古代の医術における気質と体質の理論、政治学における現実主義的な情念の理論、宗教における人間の二面性 (Zweiseitigkeit) の経験、芸術における人間の心の仕組みと、その表現形式等々。これらの文化体系の中で獲得された広い意味での「人間知一般」のなかに、教育学的人間論は属しているが、特に教育という課題の上に立つ「人間知」は、そこに本質的特徴をもっていなければならない。というのは、さまざまな文化体系のなかで遂行される「人間論的諸経験」を、教育学 (Erziehungskunst) は「自分で集約」<sup>17)</sup>し、たえず全体的人間という立場でとらえる、固有な形の人間知を展開させなければならなかったからである。そのような人間知が獲得されるのは、「現実主義的に見ることと、理想的に見ることとの固有な混合」<sup>18)</sup>によってであり、あるがままの人間を把握しつつ、同時にそこに、あるべき人間の姿を把握することによってである。かつてゲーテが、「人間というものは、あるがままに扱っていたのでは益々その人を悪くしてしまう。人間をそうあるべきように取扱ってやれば、その人たちがゆけるところまでは導いていってやれる。」<sup>19)</sup>と説いたごとく、教育的人間論は、現実主義的人間知のみならず、同時に理想主義的人間知をも包含していなければならない。ノールはこの二重の考察法の根拠を、キリスト教において把握された「人間の本性の二面性」「二重性」の洞察に基礎づけ、そこに「心理学の二重の出発点」<sup>20)</sup>を求めている。それによると、心理学はそもそも、心的生活を、「ある限られた数の明らかに一定の要素と、その法則的な因果関係から見通せるようにしようとする」<sup>21)</sup>「自然科学的構成的心理学」<sup>22)</sup>としてはじまったのであるが、しかし

われわれは心的生活を個々の要素の合計として説明することはできないのであって、そこには、個々の要素を絶えず中心(Zentrum)から把握し、「全体から見ること」(das Sehen aus dem Ganzen)<sup>23)</sup>が要求される。そのような心理学を彼は、「自然科学的心理学」と対比させて、「精神科学的心理学(geisteswissenschaftliche Psychologie)」と呼び、「統一から出発し、あらゆる心的生起並びに精神のあらゆる所産を、精神的生を了解する連関から解釈する」<sup>24)</sup>新たな心理学を要請したのである。ここでノールが説く「心理学の二重の出発点」が二重であることの意味は、人間の本質の二重性に深く根ざした二つの研究方法、すなわち「自然科学的心理学」と「精神科学的心理学」との相互補完的な提携である。ノール自身の言葉で言うなら、「二つの心理学は、同じ対象を研究する単なる二つの異なった方法ということではなくて、人間が、外から説明し、内から了解する二つの異なった方法で接近しうる二重存在(Doppelwesen)である」<sup>25)</sup>ということである。

さて、「中心」から把握し、「全体から見」、「連関から解釈する」精神科学的心理学の前提となっているのはいかなる事態であろうか。ここにノールの人間理解の前提となっている視点を端的にとらえることができ、同時に彼の説く Kunde の特徴を理解することができる。まず第一の前提は、「あらゆる人間は、本質的になんらかの仕方、全体の人間、つまり人間というシステムを自分にもっている」<sup>26)</sup>ということ。われわれが他者を了解しうる可能性はこの第一の前提に基づいており、この前提のないところでは、たとえば「盲目者にとって、他者を色彩的に見ることがそうである」<sup>27)</sup>がごとくに、了解の限界にぶつからざるをえない。「どのような人間にも本質的に人間性全体(die ganze Menschheit)が息づいてお」<sup>28)</sup>り、その事実が、「人間論」の発端を与える前提である。第二の前提は、「われわれは、心的生の了解において、決して単に抽象的な個別的様相に関わっているだけでなく、個々においてもつねに全体と関わっているということ」<sup>29)</sup>である。個々に分析されたばらばらの様相は、単に因果連関的に結合されるというだけではなくて、その個々の様相そのものにすでに、行為するというすべての精神的存在の総体性(Gesamtheit)が前提されている。「なぜなら、行為の究極的根底は、全体(Ganzes)としてのわれわれの生き生きとした存在だからである」<sup>30)</sup>。第三の前提は、「それぞれの個性(Individualität)には、心的多様性を内から形づくっているひとつの統一(Einheitpunkt)が存在する」<sup>31)</sup>ということ。たとえ、個別的なばらばらの様相のみを示しうる場合ですら、われわれは、そこにそれらの「統一の要求」<sup>31)</sup>をもっているのであり、「そのような<内的帰結>を信じるがゆえにのみ人間論を推進することができる」<sup>32)</sup>のである。

## 二 緊張構造としての性格

ノールは、プラトンのファイドロスにおける人間理解に基づいて<sup>33)</sup>、心の層構造(das Schichtenaufbau der Seele)を説いている。それによると、「人間はみずから体験するよういかなる統一的存在でもなく、まず第一に統一が生じるはずの多重的存在である」<sup>34)</sup>。その多重性をノールは四つの層によって説いている。すなわち、第一の層は欲情という生物学的層(衝動の層)であり、この層は「根源的多様性」の層であり、人間における多頭の動物としての存在の層である。第二の層は、人間におけるライオンの存在の層である。これは気概(Thymos)の層と呼ばれ、権力所有、勝利への好戦的意志の層である。プラトンは、「この二つの層を二匹の馬になぞらえて……むちを必要とするはみのきかない動物と、打たれることなくただ言葉の命令によって、名誉欲にもとづいて高い営みに達し、生の意志によって満たされた気高い勇気ある(mutig)動物」と説いたのである。第三の層は、この二匹の馬に対する御者としての能力をもつ層である。「この層は本来的に人間的なものとしてきわたせられる」<sup>35)</sup>層であり、それは、「より一般的に言えば、事柄への無私の傾倒によって特徴づけられる〈精神的根本方向〉、あるいは〈関心〉」<sup>36)</sup>の層である。さらに第四の層について述べるなら、プラトン自身は必ずしもこの層を自覚的に展開していたわけではないが、ノールはそれを、前者三つの層とは原理的に全く異なった層として明確に説いている。すなわちその層とは、「それによって、内容的には何も新しいことが人間に生じるわけではない」<sup>37)</sup>が、見逃がすことのできない「層構造における究極的なもの(ein letztes im Schichtenbau)」<sup>38)</sup>の層である。つまり、「ある程度水平的に経過する自己と世界との対決の形式の背後に、今や、第二のものとして、われわれの人格の垂直的な構造が存立する……」<sup>39)</sup>。このことを層構造との関連で言いかえるなら、「人間のうちなる精神的根本方向の背後に、しかもそれより一層低い層の背後にも、常に自己の自己性(die Selbigkeit des Ichs)、つまり〈人格(Person)〉という究極的中心的統一があり、……われわれの生における、あらゆる同一性(Identität)と制約はそこに由来する」<sup>40)</sup>のである。そこで次にこのような層構造に基づいて彼が説いた性格についての論述へと進めよう。

さて、ここでまず第一に注目すべきはそれぞれの層の対立関係についてである。「それぞれの層はそれ固有の法則性をもっている」<sup>41)</sup>のであり、「そこにある多様性に従って、つまり衝動の層での情欲の差異性、精神的層での様々な関心に従って、層自身でも様々な可能性があ」<sup>41)</sup>る。それぞれの層の固有な法則によって実現される人間の生は、まさしく矛盾(Widerspruch)、対立(Gegensatz)、不協和音(Dissonanz)、異質なもの(Heterogenes)しか見い出せない世界であり、この世界の構造を、ノールは対極的(poral)な構造と呼んだのである。たとえば、彼は、前者三つの層とその背後にいわば垂直的な構造として存立する「究極的中心的統一」との関係、対極的關係として説いている。「第四の層と、他の三つの層との対極的な関係から、人が人間のうちなる素質、可能性、生の充実と名づけるすべて

のものと、それ自身を根拠として生じる人間の人格力(Personkraft)との間の根本的対立が生じる」<sup>43)</sup>。彼はこの根本的対立にもとづいて、二つの全く異なった人間のタイプ、すなわち衝動の豊かさ(Triebreichtum)、生産的な諸端緒(produktive Ansätze)をもつが、形式的中心(das formale Zentrum)の弱いタイプ、きちょうめんであり、規則正しく、信頼できるが、生がより貧弱(lebensärmer)なタイプを説いている。いずれにしてもここでは、それぞれの層の対立関係が人間の生の多様性、言いかえるなら生の充実として説かれていることに注目しておかなければならない。また第二に注目すべきことは、人格の形式的性質についてである。「われわれのうちなる究極の統一は、その統一に対して、知覚や体験による認識、空想や体験による実践的生の中で、いつもそれらが与えられねばならない固有な内容をもっていない」<sup>44)</sup>のである。いわば、「その統一は純粹に形式的な性質をもっている」<sup>45)</sup>のである。第三に注目すべきは、それぞれの層の矛盾し対立する構造が人間の性格の緊張構造として説かれている点である。「ひとりひとりの性格はこれらの諸層の緊張構造であり、人間が諸層相互の関係をいかに体験するかということは、彼の精神的形態と、その形態のダイナミズムが規定する」<sup>46)</sup>のである。

ここで注目した三点に関連して、ノールの性格に関する論述をさらにたどってみよう。われわれは自分自身において、また中間のなかにあつて、矛盾についての素朴な経験をする。その場合、「その矛盾は性格そのものというより、単に表現にのみあるように思われ」<sup>47)</sup>。しかし果して矛盾が体験されるのは、単に、「人間が外からみられるがゆえに」<sup>47)</sup>、外からのみ解釈しようとするのがゆえに、そこからその人の内と外との矛盾が生じるからであろうか。もしそうであるのなら、その人を内から理解しさえすれば、「その矛盾は、性格という統一にもとづいて、主尾一貫した形で生じるであろう」<sup>48)</sup>か。しかしながら、現実になれわれは性格そのもののうちに想定せざるを得ない矛盾に遭遇する場合がある。なかんずくノールによれば、「人間は、たしかに最初からいかなる内的統一をもたず、世界へと向けられ、少なくともさしあたっては全くばらばらに勝手な道を進む衝動の方向の多様性(Mannigfaltigkeit)をともなつて現われる」<sup>49)</sup>。この多様性の意味するところは一面では内容豊かな生の充実であり、他面では、不協和音であり、緊張(Spannung)状態である。多様性が同時に二つの意味をもっているということは、多様性が絶えず統一を指示しているということである。多様でありながら統一への要求を絶えず秘めているというところに、緊張という事態が成立する。「われわれの心の構造の諸層も、さしあたっては、確固たる関係のうちにあるのではない」<sup>50)</sup>とノールも説くごとく、そこには背景に諸層の統一が前提されている。性格は緊張をはらみつ、その意味では、「性格は常に危険のなかでのみ活動」<sup>51)</sup>しながら実現される「歴史的所産(historisches Produkt)」<sup>51)</sup>である。性格とは、生得的に与えられた素質の矛盾、対立、多様性を統一しようとするところに実現される「ひとつの緊張構造(eine



Spannungsgefüge)』を表わすものである。ノールは、この緊張構造の背景にあるものとして、生そのものの構造について端的に語っている。「すべての生はその内的構造からみて対立的であ」<sup>53)</sup>り、「われわれのより高度な生はそのような対立の統合(Synthese)の成果である」<sup>54)</sup>。

さて、ノールの層構造においてわれわれが理解したことは、層の対立的構造であり、同時にその対立の「究極的中心的統一」としとの人格の問題であった。しかしそれとの関連でみた限りの性格の論述のなかに、われわれは、「究極的中心的統一」の問題を把握することができたであろうか。われわれがここで確認しえたことは、「緊張構造としての性格」ということである。それではわれわれはこれ以上、ノールの説く性格に、「統一」への方向をたどることはできないであろうか。われわれは、次いで彼の説く主観的性格と客観的性格に「統一」への方向を探ってみよう。

### 三 主観的性格と客観的性格

ノールは、ヘルバルトの次の文を引用しながら、性格の主観的部分と客観的部分に注目している。「彼(人間)は、自分自身を観察し、そしてみずからを理解し、心になうように行為し、また、みずからを方向づけるかもしれない。しかし、このような観察がなされるに先立ってすでに、事実や外的事物の中に没入しながら(versunken in Sachen und Äußerlichkeit)人間はある意志を、時には、きわめてはっきりしたある性向をもっている。このような性向は客観的なものであり、これに対して、全く別の心情状態において作り出された新しい意志によって観察している主観は、これに合致するか対立する」<sup>55)</sup>。ここには性格の客観的部分に関して、人間が「事実や外的事物の中に没入しながら」もつ「きわめてはっきりしたある性向」と述べられ、また、主観的部分に関しては「全く別の心情状態において作り出された新しい意志によって観察している主観」と述べられている。そこで「事実への没入」とか、「新しい意志」という言葉が何を意味しているかということ、ノールの理解に従ってとり出してみよう。その場合の問題点を要約するなら次のようになる。そもそも主観的性格とは何か、客観的性格とは何か、また、その両者が対立するという事態はどのように理解されるか、言い換えるなら、何故に両者の対立が起りうるのか、そして最後に、両者の統一の問題はどのように考えられるべきだろうか。

ノールによれば、「客観的性格とは、われわれが現に今そうであるところのものを表わし、主観的性格とは、われわれがそうありたいところのものを表わし、われわれがそれによって客観的性格に立ち向かい、その現実性(Wirklichkeit)を押しつける指導像(Leitbild)のもつ検閲という固有な力を表わしている」<sup>56)</sup>。「われわれが現に今そうであるところの

もの」を、ノールは真なる自己 (wahres Ich) という観点で説いている。一体、真なる自己とはどのようなものだろうか。われわれが他者を研究する時には、他者はただちに統一的な像として把握される。しかし「真なる自己とは何か」を問う時、ほかならぬその問い自身によって真なる自己はおおいかくされてしまう。一体、私はだれであるのか (Wer bin Ich?) と問いながら、われわれはほかならぬ自分自身から遠ざかっているのである。ノールは、鏡にみる自分の姿や、蓄音機の自分の声に例をとりながら、そのいずれも自己自身を把握する手段とはなりえないと説いている。逆にわれわれが自分の姿を見自分の声を聞いて体験するのは、真の自己とはあまりにもかけはなれた自己に対する驚きである。芸術家達が好んで自画像を描くその理由は、「単にいつでもモデルを意のままにできるということにあるのではなくて、自分の姿のもつ絶えず新たな謎に対する形而上学的驚き (das metaphysische Staunen über das immer neue Rätsel der eignen Erscheinung)」<sup>57)</sup>にあるのである。だれも自分自身を見ることはできず、ただ、刻々と移り変わる自己の一断面を、何らかの媒体を通して知ることができるのみである。その意味で、「客観的性格は内的経験そのものにとりひとつの秘密であ」<sup>58)</sup>り、あるいは「客観的性格はひとつの問題である」<sup>59)</sup>と言われたのである。ここでわれわれが客観的性格に関して確認できることは、「われわれが現に今そうであるところのもの」、言い換えるなら「事実や外的事物に没入している」自己すなわち即事性 (Sachlichkeit) という人間の在り方である。しかしながらこの点にこそ客観的性格の危険がある。すなわち、「われわれの中にある客観的性向は、主観的性向の面前で自己を適法化するために原則を見い出そうとする」が、その原則は絶えず主観的原則に墮する危険があるのであり、言いかえるなら「即事性」の名のもとでの自己欺瞞の危険があるのである。まさしく「人間は好んでごまかしの中に生きようとする」<sup>60)</sup>のである。

次に主観的性格についてであるが、それは「われわれがそうありたいところのもの」であり、言いかえるならそれは、「われわれがそれに従って自分を形成 (bilden) する指導像」<sup>61)</sup>を産み出す根拠であり、そのような「指導像のもつ検閲という固有な力」である。ここで主観的性格の二つの契機に注目することができる。ひとつには、指導像を産み出すという契機であり、その意味では主観的性格は空想に終わり独断に陥る危険もある。またひとつには、自ら産み出した指導像によって「客観的性格に立ち向かう」「検閲という固有な力」の契機である。われわれは、自ら産み出した指導像によって、絶えず自己の客観的性格を検閲しているのである。この二つの契機が、ヘルバルトにおいては「全く別の心情状態において作り出された新しい意志によって観察している主観」と説かれたのである。

それでは何故に主観的性格と客観的性格の対立が生じうるのだろうか。ノールは「性格の主観的部分と客観的部分との間の不協和音 (Dissonanz)」を、病理学上の障害の原因として説いているが、しかし反面、「人間のあらゆる偉大さは、この対立の強大な緊張からの

み生ずる」<sup>62)</sup>とも説いている。何故にそのように説きえたのであろうか。その理由の第一は、「われわれは常に現実と理想との間の相剋(Zwiespalt)の中に生きている」<sup>63)</sup>という、彼の根源的人間理解に基づいている。言いかえるならそれは、「存在と理想との二律背反」<sup>64)</sup>であり、「われわれの素質という客観的素材は、その真の意味をそこから始めて獲得するひとつの頂点に向かっていつも秩序づけられ、われわれの実存のこの理想は、われわれの現実にいっしょに属している」<sup>65)</sup>という彼の立場である。もっと言うなら、まさしく主観的性格と客観的性格の対立こそ、自己の内的矛盾という形で、人間が未来に対して関わり<sup>66)</sup>をもつその関わり方を表わしたもののなのである。次に理由の第二は、客観的性格そのもの、主観的性格そのものに求められることができる。客観的性格は主観的性格に対して原則を見い出そうとするが、原則を見出した瞬間に客観的性格は客観的性格でなくなり、その原則は主観的性格の産み出した指導像となる。逆に言うなら、客観的性格が客観的性格でありうるのは、主観的性格との対立的・矛盾的関係においてのみである。またさきに述べたごとく主観的性格は「われわれがそうありたいところのもの」であり、「客観的性格に立ち向かい、その現実性を押しおける」指導像を産み出す根拠であった。まさしく主観的性格が主観的性格であるのは、「客観的性格に立ち向かい(entgegengetreten)」客観的性格の現実性を「押しおける(verdrängen)」働きにおいてである。ここでわれわれは、ノールが「性格とは、そこで常にある性向が、その逆性向によって追いつめられている緊張構造を表わしている」<sup>67)</sup>と述べた、その真意を理解することができる。

#### 四 統一(Einheit)の問題

さきに二章において、人間の心の層構造をみた。しかしそこで確認したことは、「それぞれの層は固有の法則性をもつ」ということ、また「層自身でも様々な可能性がある」ということである。言いかえるならば、われわれはそれらの層を「統一」という視点で理解しようとしたのではなく、逆に「多様性」(Verschiedenheit, Mannigfaltigkeit)という視点で理解したのである。また「層構造における究極的なもの」として、「人格という究極の中心的統一」に触れたが、しかしそこで確認したことは、他の三つの層との対極的な関係である。対極の関係が意味するところは、「統一」そのものではなくて、さしあたり対極性という形で示唆された「統一の問題」とみなすことができる。さらに三章において主観的性格と客観的性格の対立的関係をみたが、そこにも「統一の問題」が残されたままであり、さきどりし言うならそれが「性格の究極的形式原理、すなわち自由な精神的投入」(ein letztes Formprinzip des Charakters — der freie geistige Einsatz)<sup>68)</sup>の問題である。

われわれはこの「統一の問題」をみて行くことにより、ノールの層構造に基づく人間理

解の核心について述べることができる。しかしながらノールにおいては、この「統一」が、単純にすでにできあがった形で現存しているのではないという点に、「統一の問題」の「問題」たるゆえんがある。たとえば主観的性格に関連して述べるなら、「統一としてわれわれがもつのは、さしあたっては、単に自分の理想的自己、つまり自分のよりよき存在の夢、自分の実存のより高い意味である」。言いかえるならここでの「統一」とは、主観的性格の産み出す理想像である。したがってそれは、「単なる〈フィクション〉でもありうる」<sup>69)</sup>。人格(Person)という語がもともとマスクを意味したように、たとえば小さな子どもでさえ主観的性格の産み出した理想像というマスクを身につけ、それがあたかも真の自己であるがごとくに演じる(spielen)。しかしながら、演じている役割がいつ真の自己であるのかという問いは残されたままである。言いかえるなら、われわれが主観的性格の側面から「統一」を求めても、主観は、どこまで行っても理想と現実との間を揺れ動いており、「原像とゆがんだ像との間を揺れ動いている」<sup>70)</sup>のである。それではわれわれは客観的性格の側面から「統一」を達成することができるであろうか。ノール自身の問い方で言うなら、「一体、客観的性格は一般にそれ自身にひとつの統一を所有しているであろうか」。ノールはこの問いに対して、ゲーテの『オルフォイス風の原語』<sup>71)</sup>における「デーモン(Dämon)を手掛りとしながら「統一」について説いている。それによれば「デーモン」とは、個人をそれぞれの他者から区別する「人格という個人性(Individualität)」を意味し、「それ自身からのみ展開されるべき本質」(nur aus sich selbst zu entwickelnde Wesen)<sup>72)</sup>を意味している。しかしその場合ノールが注目しているのは、ゲーテの説く、「デーモンの独自性(Eigentümlichkeit)は、われわれにとっても他者にとっても、ひとつの秘密である」<sup>73)</sup>という点である。この点についてノールは、「このデーモンがわれわれにとりひとつの秘密であるなら、その根源的統一は形而上学的理論である。」<sup>74)</sup>と言っている。まさしくそれが、「客観的性格はひとつの問題である」と言われたゆえんであり、ほかならぬそのことがノール自身にとっての嘆きでもあった。「ここに人間論の全体的形而上学的困難さが現われる。つまりいつ私は本来的に私自身であるだろうか」<sup>74)</sup>a。それではわれわれは「統一の問題」をどのように考えればよいのだろうか。ノールはこの論点を個性(Individualität)の概念によって説いている。すなわち、「個性という概念は二重的(doppelseitig)である。その一面は、素質の中に与えられた量的に多様なものと大きさを意味し、もう一方の面は、形相(Eidos)として質料(Hyle)に形を与える精神的統一(die geistige Einheit)を意味する」<sup>75)</sup>。ここには見逃がすことのできない重大なことが語られている。個性は、一面では多様性を意味し、他面では統一を意味する二重的構造を有している。われわれはここに語られている「多様性」をどのように理解すればよいか、あるいは「精神的統一」とは一体いかなるものであろうか、あるいは、「統一の問題」とこの二重構造とはどのような連関にあるのだろうか。これらの問いに答え

るためには、再びノールの性格についての論述をとりあげなければならない。しかしいうまでもなくここでは、性格のもと緊張構造が本来的に意味している事態をあきらかにとり出すために「統一の問題」という論点でとりあげるのである。

彼はカントの『人間学』における、「心術(Gesinnung)としての性格」を参照した上で、彼みずからの性格の定義をしている。性格とは「自由な精神的投入に由来する心の形式諸原理」(die Formprinzipien der Seele, die aus dem freien geistigen Einsatz stammen)<sup>76)</sup>である。「自由な精神的投入」は、「なるほど形式的ではあるが、しかしある規則を自己に措定し、その措定された規則に基づいて生きる可能性をもつエネルギー」<sup>77)</sup>によって生起する。ここで重要なのは、「自由な精神的投入」にあたってわれわれは、「自然的衝動から離れ」<sup>78)</sup>、「より重要なことへ向けられているある衝動」(ein auf das Größere gehenden Impuls)<sup>79)</sup>をもっていることである。言いかえるなら「現存在のより高い段階」すなわち「指導的理念」(die leitende Idee)<sup>80)</sup>をもっていることである。それではこの「より高い段階」を志向することにより「統一」が達成されるであろうか。いうまでもなく、われわれは「自由な精神的投入」において、みずから指定した指導的理念に従うのであるから、そこに指導的理念の「無限な多様性の可能性(die Möglichkeit einer unendlichen Verschiedenheit)」<sup>81)</sup>が生じる。彼は「性格の形式としての究極的精神的投入」<sup>82)</sup>を、「個人の形而上学的生活態度」、すなわち世界観(Weltanschauung)と呼び、それに三つの典型的な根本形式を区別している。実証主義あるいは自然主義、汎神論あるいは客観的理想主義、主観的理想主義あるいは人格性と自由の理想主義がそれである。この世界観の三つの形式は、「それぞれ現実の一面にその根拠をもっているから、それらをひとつに解消する可能性は存在せず」<sup>83)</sup>、まさしく「世界観の多様性(die Mannigfaltigkeit der Weltanschauungen)」が存在するのみである。この三つの形式は、われわれが今まで見てきた心の層構造に基づいている。自然主義はわれわれの生得的な衝動、素質の層に基づき、客観的理想主義はわれわれの客観的性格に基づき、主観的理想主義はわれわれの主観的性格に基づく。それぞれの立場がひとつになりえないということは、「人間が現実のひとつの特徴を、形而上学的に決定的なものとして把握し、それを根拠にして自分の生を形づくる」<sup>84)</sup>ということに基づく。

さて、個性が他面では精神的統一を意味することはすでに述べたが、ここで、「統一」そのものについての論述に入ろう。この「統一」に関連してわれわれは、個性が「素質によって制約された個性から、精神的個性へ段階的に前進(Stufenfortschritt)」<sup>85)</sup>するというところに注目しなければならない。すなわち、個性が二重的であるということだけではなくて生成発展の途上にあるということ、言いかえるなら「歴史的個性」(historische Individualität)<sup>86)</sup>であるということに注目しなければならない。というのも、この点に注目することによって、精神的統一は決して前もって与えられているものではなく、まず達成されるべきものである

ということを理解することができるからである。ノール自身の言葉でいうなら、「われわれのより高い個性の統一は与えられていないで獲得(erwerben)され、われわれはそれを現存在の進展のなかで、苦心して獲得する」<sup>87)</sup>。さらに言うなら、「精神的統一はそれ自体で創造的なものとして(schöpferisch wie sie ist)、今や歴史的世界(die geschichtliche Welt)と織り合わされる」<sup>88)</sup>。個性が二重的であり、しかも歴史的であることを確認したが、これと同じ観点で、彼の説く人格をとらえることができる。二章でみたとうり、彼は人格を、「究極の中心的統一」と呼び、「純粹に形式的な性質をもつ」ものとして説いた。それでは、ノールの説く人格は内容を有していないのだろうか。彼は別のところでは同じ人格について、「人格という内容豊かな核」(ein gehaltvoller Kern der Person)<sup>89)</sup>と語っているが、「形式的な性質」という論述と首尾一貫して理解するにはどのように解釈されればよいのだろうか。ここに個性を理解したのと同じ視点をとり出すことができる。人格は一面では形式的な中心的統一である。その意味ではそれはひとつの核(ein Kern)である。これは個性が精神的統一として説かれたのと同じ視点である。また他面では、人格は豊かな内容もちうる。この点でも個性に関して説かれたのと同じ視点をとらえることができ、したがって、その限りでは人格も二重的である。しかしながら、両者の内容的側面には決定的な相違がある。個性が「多様性」をもちえたのは、「素質の中に与えられた多様なもの」としてである。それに対し、人格が内容豊かでありうるのは、歴史的生成発展の流れのなかにおいてである。ここで問題となっている、個性の「多様性」と人格の「内容的豊かさ」のちがいを、彼の言葉で次のように言うことができる。「個々の素質と衝動は、さしあたりばらばらに作用し、苦心し純化する(in Arbert und Läuterung)長年の進展のなかで、やっと、人格という内容豊かな核が生起する」<sup>90)</sup>。そのようにして生起した核、すなわち「内容豊かな統一(eine inhaltvolle Einheit)」<sup>91)</sup>を、彼は「人格性」(Persönlichkeit)と呼んだのである。「多様性」と「統一」との関連を人間の生に即して述べるなら、次のような人間にとっての二重の課題として示すことができる。「われわれの生の課題は、この根源的多様性と共に生き、精神的統一と秩序をわれわれのなかに苦心して獲得すること(erarbeiten)であり、それは決して終ることのない営みである」<sup>92)</sup>。

ノールの説く「多様性」は、個々の要素が並列的に存在しているということではなく、生という豊かな内容に深く根ざすものであり、「根源的多様性は、まさしくあらゆる自由に創造する発展の意味であ」<sup>93)</sup>った。また同時に、精神的統一も、「それ自体で創造的な」ものであった。したがって、ノール自身の言葉で本章の主題である「統一の問題」をいうなら、「生き生きとした統一は絶えず緊張を保持している」(lebendige Einheit stets die Spannung bewahren)<sup>94)</sup>ということであり、そのような「統一」とは、まさしく「力動的統一」(dynamische Einheit)にほかならないのである。

## 文 献

- 1) Herman Nohl: Charakter und Schicksal, Eine pädagogische Menschenkunde, Frankfurt/M. 1939, 7. Auflage 1970 (以下, C. u. S. と略す), S. 10.
- 2) ibid.
- 3) Herman Nohl: Ausgewählte pädagogische Abhandlungen, Besorgt von Josef Offerman, 1967 (以下, A. p. A. と略す), S. 28.
- 4) C. u. S., S. 20.
- 5) Ebenda, S. 11.
- 6) Ebenda, S. 10-11.
- 7) Ebenda, S. 10.
- 8) A. p. A., S. 29.
- 9) Vgl. Klaus Bartels: Die Pädagogik Herman Nohls, Weinheim und Berlin, 1968, S. 35 ff.
- 10) A. p. A., S. 30.
- 11) C. u. S., S. 12.
- 12) Ebenda, S. 13.
- 13) Ebenda, S. 14.
- 14) A. p. A., S. 34.
- 15) C. u. S., S. 14.
- 16) ibid.
- 17) Ebenda, S. 15.
- 18) Ebenda, S. 16.
- 19) ゲーテ, 『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』, ゲーテ全集, 第5巻, 高橋義孝・近藤圭一訳, 人文書院, p. 460.
- 20) C. u. S., S. 20.
- 21) ibid.
- 22) C. u. S., S. 21.
- 23) Ebenda, S. 20.
- 24) ibid.
- 25) C. u. S., S. 24.
- 26) Ebenda, S. 21.
- 27) ibid.
- 28) C. u. S., S. 22.
- 29) ibid.
- 30) ibid.
- 31) ibid.
- 32) ibid.
- 33) Vgl. Fritz Blättner: Geschichte der Pädagogik, Quelle und Meyer, Heiderberg 1973, S. 56. ここで彼は次のように述べている。「ヘルマン・ノールは, プラトンの図式を教育学的人間論の構築のために役立つことにより, それ(多元論的形式)を精神豊かな仕方で再びとりあげた」。
- 34) C. u. S., S. 29.
- 35) Ebenda, S. 30.
- 36) ibid.
- 37) C. u. S., S. 32.
- 38) ibid.
- 39) A. p. A., S. 36.
- 40) C. u. S., S. 32.
- 41) Ebenda, S. 34.
- 42) ibid.
- 43) C. u. S., S. 33.
- 44) Ebenda, S. 32.
- 45) ibid.
- 46) C. u. S., S. 34.

- 47) Ebenda, S. 71.
- 48) ibid.
- 49) C. u. S., S. 72.
- 50) ibid.
- 51) C. u. S., S. 81.
- 52) Ebenda, S. 76.
- 53) ibid.
- 54) C. u. S., S. 80.
- 55) J. F. Herbart : Allgemeine Pädagogik aus dem Zweck der Erziehung abgeleitet, 1806. 邦訳書, 『一般教育学』, 三枝孝弘訳, 明治図書「世界教育学選集」, p.148.
- 56) A. p. A., S. 37.
- 57) C. u. S., S. 49.
- 58) ibid.
- 59) C. u. S., S. 52.
- 60) Ebenda, S. 47.
- 61) ibid.
- 62) C. u. S., S. 73.
- 63) A. p. A., S. 37.
- 64) C. u. S., S. 50.
- 65) Ebenda, S. 24.
- 66) Vgl. A. p. A., S. 37.
- 67) C. u. S., S. 79.
- 68) Ebenda, S. 177.
- 69) Ebenda, S. 50.
- 70) ibid.
- 71) エッカーマン, 『ゲーテとの対話』(中), 山下肇訳, 岩波文庫, p.327, 註84参照.
- 72) C. u. S., S. 51.
- 73) ibid.
- 74) ibid.
- 74)a ibid.
- 75) C. u. S., S. 178.
- 76) Ebenda, S. 177.
- 77) ibid.
- 78) ibid.
- 79) ibid.
- 80) ibid.
- 81) C. u. S., S. 178.
- 82) Ebenda, S. 180.
- 83) Ebenda, S. 182.
- 84) Ebenda, S. 184.
- 85) Ebenda, S. 178.
- 86) Ebenda, S. 179.
- 87) Ebenda, S. 53.
- 88) Ebenda, S. 178.
- 89) Ebenda, S. 53.
- 90) ibid.
- 91) ibid.
- 92) C. u. S., S. 72.
- 93) ibid.
- 94) ibid., S. 72-73.



## Die Struktur des Lebens bei Herman Nohl

Satoshi Ōkubo

Herman Nohl versteht unter der Menschenkunde eine "historia" des Menschen, die methodologisch auf den Doppelcharakter des Menschen begründet wird. Es ist ihm ein unvermeidbares "Schicksal", daß der Mensch ein Doppelwesen ist. Der Mensch ist ein natürliches und zugleich geistiges Wesen, ein mitten in der Wirklichkeit lebendes und zugleich auf sein Ideal hingereichtetes Wesen.

(1) Der Verfasser bestrebt, die doppelte Struktur oder die Polarität des menschlichen Lebens als das Hauptthema Nohls klar zu machen. Im Hinblick auf diese Doppelheit des Menschen hat Nohl, die damalige Psychologie kritisierend, die Notwendigkeit der gegenseitigen Ergänzung beiden Richtungen, d. h. der naturwissenschaftlichen Psychologie einerseits, und der geisteswissenschaftlichen andererseits behauptet. Denn "die zwei Psychologien sind nicht bloß zwei verschiedene Methoden, mit denen der gleiche Gegenstand bearbeitet wird, sondern der Mensch ist ein Doppelwesen, dem wir uns auf zwei verschiedenen Wegen nähren können, von außen erklärend, von innen verstehend" (H. Nohl, Charakter und Schicksal, S. 24).

(2) Die Grundbegriffe, mit denen Nohl die Doppelheit des menschlichen Lebens weiterforscht, sind die "Verschiedenheit" des Schichtenaufbaus des Menschen und die "Einheit" des Lebens. Im Begriff der Verschiedenheit des Schichtenaufbaus kann man schon die widersprüchliche, porale Struktur des Lebens finden. Hier tritt die Beziehung zwischen subjektivem und objektivem Charakter als die zentrale in die Betrachtung. "Der <objektive Charakter> bezeichnet das, was wir jetzt sind..., der <subjektive Charakter> das, was wir sein möchten..." (H. Nohl, Pädagogische Menschenkunde, 1928, in ; Ausgewählte pädagogische Abhandlungen, hrsg. v. Theodor Rutt, 1967, S. 28-38). In diesem Sinn können wir sagen, daß der Charakter ein Spannungsgefüge ist.

(3) Das Problem der "Einheit" des menschlichen Lebens bezieht sich auf das Problem des inneren Zusammenhangs zwischen Charakter, Individualität, und Person. Die "sicherarbeitende" Einheit im geschichtlichen Lauf unseres Daseins will der Verfasser auch als Problem der menschlichen Geschichtlichkeit herausarbeiten. Zum Schluß wird es klar, daß Herman Nohls Menschenkunde die Lehre vom Menschenwerden ist.